
(作者が)適当な異世界ファンタジー

ルーシャ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(作者が) 適当な異世界ファンタジー

【Nコード】

N 8 6 3 3 Z

【作者名】

ルーシャ

【あらすじ】

中学3年の俺、白鳥黒^{しろとくろ}は泥棒に殺されたはずなのになぜか、生きていた。

驚いていると神様が現れて異世界に行かないか？と言う誘いがチート能力ももらい 異世界でマツタリと過ごして行く主人公の物語

※初めての作品ですので、ぎこちない点やおかしな点が御座いますが、どうか暖かい目で見守って下さると嬉しいです。

キャラ設定（前書き）

書き忘れていたキャラ設定です。

文才が無くてすみません

キャラ設定

主人公…白鳥 黒 15 男

身長 165

体型 少し細い

顔立ち 結構整っている↑自覚なし

髪 黒 少しテンパ

性格 少しめんどくさがり 正義感は強い 魔法とかに憧れてる
男女気にせず話せる

得意な魔法の属性 全部

王女…ウイン

身長 152

体型 細め

顔立ち 可愛い系で整っている

髪 緑がかったセミロング

性格 真面目 頭がいい 少し天然 恋愛事になるとテンパって良
くわからない状態になる

得意な魔法の属性 風

王…グラン

優しい人、いつも国民の事などをきちっと考えている

得意な魔法の属性 火

王妃…メリー

グラン同様優しい人

主人公の事なども気にかけてくれる
得意な魔法の属性 水

魔法部隊 隊長…ニナ

少し厳しい 魔法が得意 余り剣は使えない
得意な魔法の属性 氷

剣士部隊 隊長…セイン

強い 魔法が少し苦手 剣は得意 戦いが好き
得意な魔法の属性 特になし

プロローグ（前書き）

こんな小説を読んで頂きありがとうございます。

ぎこちない文ではありますが、よろしく願います。

プロローグ

俺の名前は白鳥黒一人しろとくろ暮らしでほのぼのと生きてる、中学3年の（一応）受験生だ。

まあ、なんでこんな自己紹介してるかってゝのも

簡単に説明すると 俺は死んだのに生きてる

何言ってるかわからないって？

H A H A H A 俺もわからないさ

さっきから眩しくてなにも見えないZE☆

わかんないからさっきまでの事を振り返る

あの時俺は勉強をしてた、そしたらとなりの部屋から物音がしたんで見に行ってみたら、泥棒と鉢合わせ 目があって、俺はぼーっと泥棒見てたら、泥棒がナイフ向けながら走ってきて刺された、そんな時はオワタ＼（＾Ｏ＾）／ってなった

そこで意識がシャットダウン

気付いたらここに居た

「・・・・・・・・・・・・・・・・るか？」

ん？何か聞こえた？気のせいかな・・・

「聞こえるか？」

何か聞こえた

『誰だ？』

聞いてみる

「おお・・・・・・・・聞こえた様じゃな 簡潔に言おう！ 私は神じや！ー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
『やっぱり気のせいみたいだ・・・・・・・・』

「スルーしようとするんじゃない!!」

ハイハイ………分かりましたよ。

『で………カミサマガボクニナンノヨウデスカ?』

「こやつめ………まあ、いい今からお主を異世界に送る」
「まじで!?!」

「ふっふっふっ 驚いておるな ただし条件がある、今から送る世界の
とある国の王女の護衛をしてもらいたい……… どう
じゃ、やってみんか?」

『やります!!!!』↑即答

「決断がはやいのお……… まあ、いいじゃろ お主に二つ
程能力を与えよう

一つは 身体力強化

単純な身体能力の強化じゃ

二つ目は 想像の創造じゃ

これも文字通り想像した物を創造するのじゃ!! どうじゃ?」
チート能力バンザイ!!

「気に入った様じゃな、それはよかった!!」

すると、急にとてつもない眠けに襲われた

「では、頑張ってくれ」

その声を聞いたあと、俺は意識を手放した

プロローグ（後書き）

感想などを頂けるとありがたいです。

第一話（前書き）

お気に入り登録数が二件もあって、驚きました
こんなものを登録していただきありがとうございます。

文才のない作者ですが、頑張って書いて行きたいと思います

第一話

どうも、起きたら変な森の中に居た白鳥黒です。

『何処に行きゃいいんだ?』

何か策を考える．．．．．

そうだ!!

『結!!』

結○師の結界使ってみましたw

『これで上に行って見れば』

そう言って軽くジャンプする

『うお!?!』

軽く跳んだはずなのにかなりの高さまで行った

『こりゃ、少しなれ無いとな』

そう言いながら、辺りを見回す。

『あ、何かでけく国見たいの発見!! 行ってみっか』

門みたいな所の前まで結界を使い降りて歩く

「その君止まりなさい!!」

何か門番さんに止められた

「黒い．．．．．髪．．．．．!! 至急、王様に

連絡だ!!」

え? 王様? 俺何かした?

暫くしたら、今度は兵士みたいな人が来た

「城へ向かうので、私について来てくれませんか?」

『分かりました』

ここは大人しく着いて行く

断るとめんどくさそうだしねw

お城に行く途中に色々聞いた。

この兵士さんはセインって名前で、剣士部隊の隊長らしい
なぜ俺をお城に連れて行くのかを聞いたら、

「それは、後で話をします」

なんて言われた。

お金の事なんかも聞けた

一番価値が低いのが銅貨

銅貨が十枚で銀貨

銀貨が十枚で金貨

金貨が十枚で白金貨　らしい、頭がこんがりそう

この世界についても聞いた

この世界は大陸は一つしかないがとても大きな川がありそれが敷居
の様な物になってるそうだ。

だいたい丸の大陸に丁度三等分位に川が流れてて、下には人間が多
く右上には獣人などが多い左上には妖精などが多いらしい。

大陸の真ん中にある大きな山には魔物が住んでいるそうだ。

色々話を聞いていたら、もうお城に着いたみたいだ

「では、こちらにどうぞ。」

そう言われ高そうなソファーに座る

「じきに、王様がこちらに來ますので」

へえ、王様か。え？王様？

”コンコン”

そんな事を考えているとノックが聞こえた。

「入らせて頂く」

そう言いながら、少し太った優しそうな人が入ってくる。

「ふむ。お主がか。若いな」

そう言って俺の事をじつと見つめる王様。

「おお、すまない自己紹介が遅れたな、私はグラン。この国の王じ
や。」

お主は？」

『私の名前は白鳥黒です。』

「黒とやら、そんな堅苦しく無くてよい、もっとリラックスして良いぞ?」

案外いい人っぽいな、この人

「さて、本題に入るかのお。黒よ、神からのお告げで聞いた【この国の王女を守るための騎士として黒髪の人間がこの国を訪れる】と、
.....それがお主か?」

『はい.....多分そうです』

やべw多分って言っちゃったw

「多分?まあ、いい.....神の使いは、相当腕が立つと聞いておる。」

このセインと戦って見てくれ」

え? 剣士部隊の隊長じゃ無かったわけ? 死ぬだろ.....
.....

「分かりました、王様」

セインさんもやる気だったorz

第一話（後書き）

次回、戦闘です。

頑張って書きますので、高評価やコメント等を貰えたら、嬉しいで
す。

第二話（前書き）

今回は戦闘です。

描写とかは、あれですが、読んでいただけると嬉しいです。

第二話

『えーと、戦わなきゃ、ダメ？』

「ダメです!!」

キッパリ言われた。

『しゃーなしか………』

今は、お城の中庭みたいなどこにいる広くて戦い易いんだろう。

「では、いくぞ!!」

そう言ってセインさんが向かってくる手には中世のイメージにピツタリな剣が握られている。

『どーするか………』

とりあえず、様子見として

『結!!』

結界でセインさんを囲ってみた

「!? はあっ!!」

一瞬驚いたみたいだけど直ぐに冷静になった様で、結界を破った

『じゃあ、こうだ』

指をクイツとあげるとセインさんの周りを土の壁が覆った

「この程度!!」

直ぐに破られるがそれも計算の内

『かーめー〇ーめー波あ!!』

ドラゴン〇ールのかめ〇め波を撃つ

「ぐっ………」

それを正面から受けるセインさん

「はああ………はあ!!」

何とかかめ〇め波を弾く!!しかし、限界な様で、その場に倒れる。

「セインよ………大丈夫か？」

心配そうに近寄ってくる王様

「はっ、大丈夫………です」

「そうか………。それにしても見事じゃ。黒よ」
ポカーンとなる俺

「セインはこの国一番の剣士だと言うのにこんなにもあっさりと倒すとは………」

「これなら、我が娘の護衛も大丈夫じゃな」

「こっちに來てくれ」

さっきの部屋に戻って來た、これから王女がくる様だ。

「娘がお主の事を氣に入るといいんじゃが………」

そんな声が聞こえて直ぐにノックが鳴った

「王女を連れて参りました」

セインさんが入ってくる。

その後ろには顔立ちの整った可愛い女の子が居た
その女の子は俺の顔を見ると、急に赤くなりセインさんの後ろに隠れてしまった。どうしたんだろ？

「紹介しよう、娘のウィンじゃ」

「ウィ、ウィンです………」

ずっと顔の赤い王女様

『白鳥黒です』

そう言ってお辞儀をして見る

すると、王様が少し暗い声色でしゃべり出した

「ウィンよ、私は護衛を付けたがらないお前が心配だ。だから、せめてこの黒一人でいいから、護衛も付けてくれ」

「えっ………わ、わかりました………」

なぜか赤くなる王女

「おお、そうか。よかったよかった」

嬉しそうな王女様

「よ、よろしく。黒………さん………」

『ごちらこそ、よろしくお願いします。 王女様』

こうして、俺は王女の護衛をする事になった

第二話（後書き）

高評価、感想などをいただけるとありがたいです。

第三話（前書き）

お気に入り登録者数が6人に増えていて、とても嬉しかったです。
これからも、グダグダと頑張って行くので暖かく見守って頂きたい
です。

第三話

どうも、可愛い娘の護衛になれて、若干テンションの高い白鳥黒です。

ぶっちゃけ、護衛って何したら良いんだろ？……聞いてみつか

『お〜じよさま〜』

ビクツとする王女

「な、何ですか……黒さん」終始顔の赤い王女

『護衛って何したら良いんですか？』

「え〜と……すいません、わからない……です」どうやらわからない様だ。

「あ、あの……黒さん!!」

『何ですか？王女様』

「え〜と、その……敬語はやめてくれませんか？あと、王女じゃ無くて……ウインって呼んで欲しいな……なんて……………」

『え〜と、了……解。じゃあさ、俺にも敬語はやめてくれないか？さん付けも』

「は……はい……………」

何だろ〜さっきから上目遣いだよ。やべえwかわいすぎるなこれw

……そんな事よりも……『腹減った……』

「じゃあ、黒……お昼でも食べに行かない？」

『りよ〜かい』そう言い食堂へ向かう俺とウイン

こっちの世界の食べ物は変な物じゃ無いかとヒヤヒヤしてたら、普通のものだった……よかった

ウィンと食堂で話していると、セインさんがこっちに来た

「やあ、黒くん」

『どうも、セインさん どうしたんですか?』

「いや、明日から訓練だと言う事を伝えようと思ってね」

え．．．．．訓練? めんどくさそう．．．．．

でもウィンを守るためか．．．．．

でも、めんどくさいな．．．．．

「なんか、変な事考えてないかい?」言う事が鋭いセインさん

『い、いえ．．．．．分かりました。で、どんな事をやるんですか?』

「それは、明日のお楽しみ」

その時のセインさんは黒い笑みを浮かべていた

「頑張って／＼」

ウィンが応援してくれた．．．．．なら、頑張らないと

それはともかく、癒されるな〜これ

第三話（後書き）

感想なども頂けると嬉しいです

第四話（前書き）

まあ、またこりもせずに戦闘です。

温かい目で見てくれると、ありがたいです

第四話

今日は特訓をするらしい。どんな内容だろ？．．．．．嫌な予感がする

訓練所に向かうと、そこにはセインさんと少し気の強そうな女の人
がいた。

「あ、来たね 黒くん。紹介するよ、彼女は魔法部隊隊長のニナだ。」

「よろしく．．．．．えーと、くろ、くん」

『白鳥黒です。よろしく』

「自己紹介が済んだら、早速特訓だ！！今日は、実戦からだ。昨日
ぼく一人じゃ勝てなかったからね、今度はニナと二人で君と戦うよ」
俺、死んだな．．．．．

「それじゃ、30分後に始めようか」

――――――30分後――――

ハア．．．．．ムリだろこれ

「いくぞ！！」

またセインさんがこっちに突っ込んでくる。その後ろでニナさんが
何か詠唱している。

俺は武器を作る、

”ごごごごご” そんな音をたてながら刀が作られて行く。

できた！！ブーチの○月完成！！

武器を手にとると、すぐそこにセインさんがいた。

セインさんが切りかかって来るのを剣で受け止める。

「ははっ なんだい？その刀は？本当に君は面白いな」

とても楽しそうなセインさん

え？もしかして、バトルジャンキー？

そんな事を考えてると、急にセインさんがバックステップで後退した。

「アイス・ニードル（氷槍）」

そんな声が聞こえた途端に尖った氷が俺に向かって飛んでくる。

『くっ……結!!』

とりあえず、結界を張る

暫くして、氷が止んだ

すると、直ぐにセインさんが突っ込んでくる。

それを剣で受け、力任せにセインさんをニナさんの方へ吹っ飛ばす。

『月牙天○!!!』

二人の方へ月牙を飛ばす

「アイス・ウォール（氷壁）」

二人の前に氷の壁ができた

”ドン!!!!”

と爆発が起こった。砂煙で周りが見えない。だんだん砂煙が晴れていったら、半壊した氷の壁があった。

「……まさか、これを壊すとはおもってなかったわ」驚くニナさん

「ニナと二人でも勝てないか……まあ、楽しかったしいや」なんか上機嫌のセインさん

「まあ、今日はこれで終了だ。まあ、これから何回かこういうのもやろうと思ってるから覚悟しといてね」上機嫌のまま怖い事言ってるセインさん

絶対に嫌です!!!

声に出さずに言った

実戦訓練 終了

第四話（後書き）

高評価や感想を頂けると嬉しいです。

第五話（前書き）

またお気に入り登録者数が増えていて、嬉しかったです。

これからも、一生懸命頑張りますので応援よろしくお願いします。

第五話

今日の訓練は、午前中にニナさんと一緒に魔法の勉強をして、午後はセインさんと剣についての勉強をする事だそうだ。

ニナさんが魔法に付いて詳しく話してくれる………
が、急に睡魔に襲われた、これは、勝て、ない

「ですから、魔法を使う時は………」

『ZZZZZ』

「アイス・ボール（氷球）」

『痛てっ』

拳位の氷が落ちて来た

「では続けます」

————省略————

つまり、魔法はその人に流れる魔力を消費して、イメージした現象を起こすと言うものらしい。その人のイメージや魔力が強ければ強い程、魔法の威力はあがるそうだ。それに人の魔力量には個人差があり、それぞれが得意な属性何かもあるそうだ。得意な属性は大体髪の毛の色でわかるのだが、俺は黒いので、わからないらしい。

「では、実際にやって見ましょうか」

そう言い中庭の方へ向かう。途中で

ウインにあった。

『あ、よ！ウイン』

「え？くろ………な、何でこんな所に？」

『魔法の練習中、今から実際にやるけど、ウインも行くか？』

「う、うん………」

ウインも行く事になった

————中庭————

「では、見本を見せます」

そう言って構える

「ファイアー・ボール（火球）」

バスケットボール位の火の玉ができた

『おお！！すげーなこれ！！ ウィンもこんなの出来んの？』

「う、うん」

そう言ってウィンもバスケットボール位の火の玉を作る

『よし！！俺も！！』

『ファイアー・ボール（火球）！！！！』

そうすると、普通に売ってるバランスボール位の火の玉になった

『あれ？何かデカくね？』

「黒さん、魔力をちゃんとコントロールして下さい！！」

『え？どうやってやんの？それ？』

とりあえず、なる様になれ！！

蛇口を開け閉めするイメージでやったら、止まった

「くろ（さん）……………すごい」「二人とも驚いていた。

「とりあえず、今日はここまでね」

やっと終わった……………午後も有るけどorz

とりあえず、ウィンと一緒にお昼を食べる。今日も美味しいお昼だった。

……………午後……………

「さて、今日は剣技と言う事だったな」何かやる気のセインさん

『あ、はい』

すると、セインさんが笑顔になり言った。

「ならば、実戦が一番」やっぱりそうだったorz

と言う事で中庭でまた戦うはめになった

「では、いくぞ！！」

今日も正面から向かって来るセインさん

今回の訓練では、剣や体術だけしか使ってはいけなかった。

どうしようかと考えていると、すぐそこにセインさんがいた。

『っ……っ……』

セインさんが横に切ってきたのを伏せてギリギリ躲す、今度は振り下ろして来たので、転がって回避し距離を取る。

『今度はこっちが行きますよ』

そういうキープ○ードを二本出現させる。

正面から向かっていき、セインさんが構えた所で横に跳ぶセインさんと俺を大きめの結界で囲む、その結界の壁を蹴りセインさんに向かって飛んでいく、それを受け流されたら、また違う所を蹴って突っ込むそれを何度か繰り返していく。しかし、さすがは騎士まだ息一つ上がっていない、

『さすが国一番の剣士ですね』

「その剣士を圧倒している君も凄いけどねwいやあ、楽しいなww」
そんな会話をしながら俺とセインさんは止まる

「さて、そろそろ終わりにしようか」
「そういう剣を構え直すセインさん」

『そうですね、俺も疲れました』
「そうやって俺も構える」

『「はああ!!!」』
二人とも正面から突っ込む

そうして大爆発が起こり結界があったので、城に被害は出なかったが、俺とセインさんはウィンとニナさんにめっちゃくちゃ怒られた

第五話（後書き）

番☆外☆編

ルーシャ「どうも、ルーシャです。今回は今日で今年が終わると言う事で、番外編とさせて頂きます」

黒「なので、この後書きは生暖かい目で見て下さると、ありがたいです。」

ウィン「それと、ここではキャラ崩壊当たり前になると思いますので、ご了承の上ご覧ください」

————————————————————

ルーシャ「いや、今年一年短かった。」

黒「うんそうだな。で、なんでいきなりこんな事やろうと思った？」

ルーシャ「いや、もう今年が終わるな〜と思ったから」

ウィン「本当にそうなんですか？」

ルーシャ「……………思いつきです。あと、ちょっとした報告を兼ねて」

黒「ちょっとした報告ねえ……………じゃあ、ちやつちやつとそれ言って切り上げんぞ!!」

ルーシャ「もう!?!……………まあ、いいか。えーと、

この小説の作者は、中学3年の中二病患者です。それで、今ら辺はちょうど受験シーズンなので、これから1〜2週間更新が出来なくなるかもしれません。その事について報告させて頂きました。」

黒「てか、お前中3だったのかよ!!」

ウィン「受験生とは思えないわね」

ルーシャ「だってこの小説、作者の思いつきで成り立ってるんだぜ？」

黒・ウィン「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

ルーシャ「ため息つくなよw」

黒「もういいや・・・・・・・・・・・・・・・・」

ウィン「諦めましょう・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルーシャ「つつー訳でそろそろ閉めますか。」

黒「お前が指揮んな!!」

ルーシャ「えーと、じゃあ来年もこんな感じだとおもいますが、」

黒「スルーされた!?!」

ルーシャ「せーの（ボソツ）」

「「「来年もよろしく願います!?!?!」」」

番外編 ※見なくても大丈夫（前書き）

今回は、勉強に耐え切れなくなった&祝い事って言う事で 番外編です

もし、新しい話かも？と期待した人がいたらすいません

特に本編には、関係無いので見て頂かなくても結構です

番外編 ※見なくても大丈夫

ルーシャ「みなさん!! あけまして、おめでとうございます!!
そして、番外編だぜ!!」

黒「…………… 前回の後書きで受験がどうこう言っ
て無かったっけ?」

ルーシャ「受験? 何それ? 美味しいの?……………」
まあ、冗談はさておき 本題に入ろうか」

黒「…………… とりあえず、話せ」

ルーシャ「はいはーい♪ なんと! なんと! この小説のお気に入り
登録者数が遂に10人を突破したのです!! わーい、パチパチ」
! って事でこの番外編を書いた次第です。」

黒「それでいいのか…………… 受験生よ」

ルーシャ「大丈夫だ、問題ない。」

黒「やかましい!! 早く勉強しろ!!!!」

ルーシャ「分かりましたよ、すればいいんだろ? すれば」

黒「何故キレるし……………」

ルーシャ「まあ、そういう事で、これから、駄作者なりに頑張りますので、応援などよろしくお願いします!!」

ルーシャ・黒「では、サヨナラ」

番外編 ※見なくても大丈夫（後書き）

この話は、作者が自己満足として書いた回です

第六話（前書き）

勉強なんて嫌いです．
．
．
．
．
．
．
．
．
．
．
．

第六話

やったー！！休みだー！！

今日は何をしようかなー♪

とりあえず、城の中を探検することにした。

歩いていると、綺麗なドレスを着た女の人に声を掛けられた

「あなたが黒ね・・・・・・・・・・私は王妃のメリーよ」王妃様だった

『白鳥黒です。よろしくお願いします』

「こっちに來て慣れずに大変でしょうけど、娘の事は任せたわよ。娘もあなたの事を気に入ってる様ですし」

俺氣に入られてるんだ、ちょっと嬉しいな

『分かりました。では、失礼します』そう言っ下がる

何かワインに会いたくなった

少し探していると、直ぐに見つけられた中庭の大きな木のお茶を飲んでいる

『おい！！ウィン！！』名前を呼ぶ

「くろ！？何で急に？」

『いや、何か会いたくなったんで』

「な~~~~~そんな~~~~~」やっぱり赤くなるウィン

「と、とりあえず、一緒にお茶でもどう？」

『あいよ』

そう言っ席に着き一緒にお茶を飲みながら、話していた。

ウインはそのうち世界を見て周りたいんだそうだ。

何か今日は、ウィンと仲良くなれた氣がする

第六話（後書き）

高評価、感想などお待ちしております

第七話（前書き）

受験に近いが気にしない作者がお送りします

第七話

今日は、訓練も兼ねてゴ布林退治をするらしい。

ゴ布林は、知能が低く基本的に戦い易い魔物だそうだ。

「いくら、ゴ布林とはいえ準備は怠らない様に」セインさんに言われる

『りょーかい』

「本当に大丈夫？」心配性の王女様

『心配すんなって』

「そろそろ行くぞ」

『わっかりました』

「じゃ、黒………本当に気をつけてね………」

『おうよ』

そして、俺達は城を出た

――――山への道――――

『あのーセインさん』

「ん？なんだい？黒くん」

『えーと、二人で大丈夫なんすか？』大丈夫だと思うが、一応聞いてみる

「心配する事はない、ゴ布林位なら2人で何とかなるよ」そう言
って笑うセインさん

『それで………ゴ布林ってどういう魔物ですか
？』敵の情報は知っておくに越したことは無いからな

「ん？そうだね………知能は低くて、4〜8体ぐらい
の群れで暮らしていて力は成人男性より少し強い位で子供位の身長
をした魔物だよ」詳しく説明してくれたセインさん

「そうそう、オーガの目撃情報もあったよw まあ、滅多に会う様
な魔物じゃ無いから安心してくれ」………フラグ

が立った気がする

『それは良かったです』フラグなんてしらん!!!!

————山の方もと————

「あと一時間くらい山を登ったら、ゴブリンの群れの所に着くよ」

あと少しか.....

〈キィィィィ〉

ん？あれって.....

「？.....なぜこんな所に？　とりあえず、片付けようか」

『分かりました!!!』

ゴブリンは7体いた。

「私が四体相手をしよう、君は残りを頼んだ」

『はい!!!!』

セインさんが、少し離れていた四体に突っ込んでいく

『行くか.....』　『そう言って構える』

『いつまでも、ウインをまたせておけないし、ここはチャチャッと決めようか』

『イオナ○ン!!!!』　『某RPGの全体攻撃魔法を使う。それをまともに受けたゴブリン達は、直ぐに倒れた。』

セインさんの方を見ると、ちょうど最後のゴブリンを倒し終わった所見たいだった。

「早いね、黒くん」　そう言って笑うセインさんの後ろに巨大な影があった.....

『セインさん!!!後ろ!!!』

クソッ.....　いくらセインさんでも間に合わない。こうなったら.....

『結!!!!!!』

そう叫んだ後に凄まじい轟音.....　ギリギリ間に合ったみたいだ。しかし、良かった.....

凄まじい衝撃を受けた結界は消え掛かっていた……
直ぐにこちらに来るセインさん

「あれは……オーガ!! なぜこんな所に!？」
やっぱりか……フラグ成立ですね

「なるほど、オーガの脅威から逃れる為にこんなふもとにゴブリン
がいたのか……」 冷静に状況分析をするセインさん

『どうするんですか!? セインさん!!』

「いや、逃げるのが一番なんだが、それだと近くの村が危ないから
ね……」

『つまり、倒せば良いんですね?』

「ああ」笑いながら答えるセインさん

「じゃあ」『いきますか』

そうして2人で走り出す

オーガの前に着いた時にオーガは腕を振り下ろしていた。それぞれ
左右に飛んで避け、構え直す。

セインさんが「斬波」と叫び刀を振ると斬撃が飛んでいった。が、
それはオーガの腕に少し傷をつけただけで消えてしまった……

『結!!!!!! 滅!!!!!!』「いつもは結界
を張るだけだが今回は滅してみる。でも、オーガは硬い様で無意味
だった。どうするか……」

オーガがセインさんに腕を振り下ろすが、大振りな為簡単に避ける
セインさん。しかし、その避けた場所に向かってオーガは脚を振っ
ていた。

「しまっ……ぐあ!!!!」オーガの蹴りをもろに受
けるセインさん

へガアアアアア!!!!

一人倒したと言う勝利の雄叫びをあげるオーガ
俺は直ぐにセインさんの所へ向かう

『ひどい怪我だな……』セインさんは気を失ってい

る様だ、とりあえず怪我を治さないと

『ベ○マ!!』そう叫ぶと傷は直ぐに消えた

そして、オーガの方へ向き殺気を放つ。オーガは一瞬驚いた様な表情を作るが、直ぐに戻しこちらに向かって来る

『俺は怒ったぞ……』そう言い魔力を練る

『まだだ……もっと……』全ての属性を持った魔力を無理やり圧縮する。出来たのは、真っ黒の野球ボール位の球、その黒は全てを飲み込みそうな色をしていた。

『喰らえ!!! カオス・ゾーン!!!!!!』そう言い球をオーガに向かって投げる。オーガは少し警戒しているが、その球を叩き落とそうと、腕を振り下ろす。オーガの手が球に触れた途端オーガを漆黒の箱が囲う、中で何が起きているかはわからないが、声にならない声が辺りを包んでいた……

暫くしてその漆黒の箱が無くなる、中には何も無かった……
…… 囲まれたはずのオーガも……

「っ……」その時セインさんが起きた

『あ、起きましたか。セインさん。』

「黒くん?……」オーガは!?!「さっきまでのことを思い出した様子のセインさん

『ああ、やつなら倒しましたよ』

「オーガを一人で?……」やっぱり君は面白いよ」呆れた様に言う

『さあ、帰りましょう……』そう言って手を差し伸べる

「ああ……」セインさんも手を取る

こうして、俺の初めての魔物討伐は大成功(?)に終わった

この時城は大騒ぎになっていた……

第七話（後書き）

高評価、感想などお待ちしております

第八話（前書き）

まだ、受験が残っていますが投稿して行きます

第八話

無事にゴブリンの討伐を終えた俺たちは直ぐに城に戻ろうとしていた。

『あれ？なんかお城が騒がしく無いっすか？』

「ほんとだ．．．．．。少し急ごうか、黒くん」

『そうした方が良さそうですね』

――――城の中――――

『とりあえず、王様の所に行きましょうか』

「そうですね」

急いで王様の所に向かう

「王様！！セインと黒、只今戻りました！！」セインさんが報告する

「おお！！戻ったか、二人とも！！」

『この騒ぎ．．．．．どうしたんですか？王様』

「おお．．．．．そうじゃった、実は．．．．．

．．．．．ウインが居なくなってしまったんじゃ」悲しそうに言う

う王様

『！？．．．．．ウインが！？』なんでウインが．．

．．．．．まさか．．．．．誘拐！？

「そうじゃ．．．．．だから、二人とも探しに行つて．．

．．．．．俺は王様が言い終える前に走り出した。待つて

ろよ、ウイン．．．．．直ぐに行つてやるからな！！

くウインく

「どうしよう．．．．．迷っちゃったな．．．．．

．．．．．」結構入り組んでいてわかん無くなっちゃった．．．．．

．．．．．

「黒………心配してるかな………」
「黒に会いたいな………でも、もうお城を出ち
やっただし………まあ、くよくよし
てても仕方ないな………」これから、どうしようかな………

そんな事を考えていると声を掛けられた

「ねえねえ、その君一人？可愛い〜ねえ〜」男の人が三人立
っていた

「え、え〜と………」私がどんな反応をしたら良い
か困っていると、一人の男が近づいて来た

「え？いやあ！！」腕を掴まれる、必死に抵抗するが男の人に力で
敵う訳がない。どうしよう？怖い、怖いよ、助けて黒！！男の顔が
近づいて来て耳元で囁いてきた

「スリープ」急な眠気に襲われた………

聞き覚えのある声が聞こえた気がした

（out）

「いやあ！！」ん？なんか聞いた事のある声が………。
俺はその方向へ向かってみる。やっぱりウィンがいた。

「スリープ」そんな声が聞こえた、ウィンの目が虚ろになって行く、
言葉からして睡眠系の魔法か………とりあえず

『そこまでだ！！！！』止めに入る

「ん？なんだお前！！」俺に反応する男A

「邪魔する様なら、容赦しねえぞ！！」声を荒げる男B

「ちゃっちゃと家に帰んな！！」笑いながらいう男C

『今すぐその娘を放せ！！じゃ無いと、ちよっと痛い目にみるぜ？』
殺気を込めて言う

「つく………行くぞお前ら！！」一瞬凄みこっ

ちに向かって来る、男共

『ナンパする相手を間違えた事を思い知らせてやるよ!!!』戦闘体制に入る俺。直ぐに片付けてウィンと一緒に帰るかな。...

『結!!!!!!』結界で思いっきり頭を叩く

「ぐあっ」男A撃沈

「おりゃ!!!」剣で切りかかってきた男Bの攻撃を避けて腹に拳を入れる

「うっ.....」気を失う男B

「な、なんなんだよこいつ.....!!!」そう言い逃げる男C

別に追う必要も無いから、放っておく

「っ.....く.....ろ?良かった」

怖かった.....怖かったよ.....」

そう言い泣き初めるウィン

『そうか.....もう大丈夫だ.....』

俺がいるからな.....『そう言って頭を撫でてやる

「ありがとう.....くろ.....」もう

泣き止んだ様だ

『さあ、帰ろうぜ.....ウィン』笑いながら言う

「うん!!!」それにウィンも笑顔で答える

何はともあれ、ウィンが無事で良かった

くウィンく

眠っていたのか、起きたら目の前に黒がいた.....

「っ.....く.....ろ?良かった

た．．．．．怖かった、怖かったよ．．．．．」

黒を見て安心したのか泣いてしまった

『そうか．．．．．もう大丈夫だ．．．．．』

・俺がいるからな』そう言って頭を撫でてくれる、黒

どれくらいの時間が立っただろう、10分．．．．．もつと長いかもしれないし、もっと短いかもしれない。とにかく、とても長く感じる時間が過ぎていった

「ありがとう．．．．．くろ」気付いたら涙は止まっていた

『さあ、帰ろうぜ．．．．．ウイン』笑いながら言

つてくれる、くろ

「うん!!」私も笑って答える

これでやっと分かった．．．．．
今まで良く分からなかったこの気持ちが．．．．．私
．．．．．くろの事好きだ．．．．．

そして、くろと二人で城に戻った

第八話（後書き）

感想などお待ちしております

第九話（前書き）

受験真っ盛りの作者が送る駄文です

第九話

ワインを見つけて一緒に城に戻る

『どうして、城を抜け出したりなんかしたんだ?』一番聞きたかった事を聞く

「え? ほら、前に話したじゃない。外の世界を見てみたいって……その事をお父様に話したら猛反発されてね、喧嘩になっちゃって……」

『そうか、なら俺も一緒に頼むよ』もちろん、同意する

「ありがとうね、くろ」笑ってくれるワイン

『いいって』俺も笑い返す

————城————

「おお!! ウイン!! 無事じゃったか!!!」

「はい……お父様……」

『あのー 王様、今回の事件のきっかけなんですが……』

「わかっておる、ワシが反対した事じゃな。しかし、ワシはワインが心配なのじゃ」

『でも、そこをなんとか』頑張ってお願ひする

「むうう……仕方ないな」許してくれた王様

「やったー!!」嬉しそうにぴよんぴよん跳ねるワイン

……可愛いすぎる

「ただし、条件がある!!」そう言われ止まるワイン

「行くのなら、、、黒と一緒にじゃ、奴なら一人でもお前を守りきれだろう。黒、いいな?」俺に聞いてくる王様

『もちろんです!!』良いに決まってる

『おわっ!?!』急にウインが後ろから抱きついて来た
バランスを崩し前に倒れる

「ありがとうくろくろ」本当に嬉しそうなウイン

『別にいいって、、、、それよりさ、降りてくれないか?』

「あ、ごめん」顔を赤くしながら、謝るウイン

『いいって』

「あゝそろそろいいかね?」王様が言った。どうやら待っててくれた様だ。なんだか俺も顔が赤くなる……………」

「すいません……………」お父様……………」まだ顔の赤いウイン

「まあ、よかろう。出発は明後日じゃ!! それまでに準備は整えておくのじゃ!! わかったな?」

『「はい!!」』そう返事して二人で向き合って笑いあう

こうして、俺とウインは旅をする事が決まった

第九話（後書き）

感想などお待ちしております

第十話（前書き）

今日、やっと受験が終わりました！！
勉強しなくて良くなったので（なってなねえよW）頑張りたいと思います

第十話

今日は俺とウインの旅立ちの日だ。

『んっっ……いい朝だな。』欠伸をしながら言う。

少しぼーっとしてから、王様の所へ向かってみる

途中でウインに会った

『よ!! ウイン』適当に挨拶しとく

「おはようくろく」ウインも返してくれる

『今日か……』

「今日だね……」

二人で王様の所へ向かう

――王様の部屋――

「ウイン、黒、今日からお前達は旅に出るのじゃ。思う存分外の世界を見て来るといい。」

「はい、お父様」

「辛い事もあるかもしれんが、気をつけて行くのだ。それと、王族と言う身分は隠して置いたほうがいいじゃろう。我々が協力出来るのはこれぐらいじゃ。」召使いを呼ぶ王様

「受け取るがいい」

それは、服だった。ただの服……

『えーと、これは……』

あれ? これだけ? なに? 俺がおかしいの?

そう思ってウインを見る

「……?」頭にハテナが浮かんでる

やっぱり俺は普通だった様だ

「これを着ていけ、見た目こそ普通の服だが、これはとてもすごい

服なのだ。」そういう王様

へへすごい服ね、そうだ!! 【サーヂ鑑定】

防御・900 魔法防御・1100 素早さup 回避力up 魔力up 毒無効

あ、この服すげえ。

俺が作ればとかそういう意見は受け付けない
召使いさんがその服をウィンに渡す

・・・・・・・・・・・・・・・・ どうかやら俺の分は無い様だ

ウィンが着替えの為に部屋を出る
暫くして戻ってくる 杖みたいなものも持ってる

その服は緑を基本としたワンピースのような服だった

「に、似合うかな？」 聞いてくるウィン

『ああ、似合ってるよ』素直に答えるとウィンは顔を赤くした
そんな俺たちを見て、召使いさん達はクスクス笑ってる

服だけじゃ無く、資金として白金貨1枚に金貨5枚、銀貨7枚と銅
貨20枚を貰った

・・・・・・・・・・・・・・・・ 多くな？

「それでは、行ってくるのじゃ!!」

「『はい』」二人で答える

「二人とも元気でね」ニナさんに言われた

「ウィン元気でね、黒ウィンをお願いしますよ」今度は王妃様だ

「少し寂しくなるが、二人とも元気でいてくれ。そしてお幸せに」
なんかおかしい事を言ってるセインさん

『それじゃあ・・・・・・・・・・』

「『いってきます!...!』」

こうして二人の旅が始まった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8633z/>

(作者が)適当な異世界ファンタジー

2012年1月13日16時58分発行